



郷土資料館の 改修工事による 長期休館のお知らせ

令和4年4月1日～

令和5年3月31日



世田谷区立郷土資料館は、区政30周年事業の一環として昭和39年(1964)9月1日に開設された、都内最初の公立地域博物館です。それから57年の歳月が流れました。その間、昭和61年(1986)の増改築工事や、平成3年(1991)の展示ケース改修工事など、幾度か改修は行われてきましたが、建設から50年以上経過すると、さすがに諸設備の老朽化は避けられなくなってきました。

そこで、このたび改修工事を行うこととなり、それに伴い令和4年4月1日から令和5年3月31日まで休館することになりました。この改修工事にあわせて、常設展示や企画展示の内容も一新いたします。リニューアルオープンは令和5年4月1日の予定です。この間、区民の皆様には、ご不便とご迷惑をおかけしますが、何卒ご理解、ご協力のほどお願いいたします。

特別展余滴

田男爵邸の庭

田男爵別邸

令和3年度特別展「多摩川と世田谷の村々」では、明治から大正にかけて政治家、官僚として活躍した男爵田健治郎の日記から、多摩川で鮎漁や蚩狩り、花火を楽しむ様子を紹介した。田は、多摩川を臨む上野毛の地（現在の五島美術館）に別邸を構え、週末を過ごした。

ところで別邸に滞在中の田の日記には、「園内桜花爛漫」「躑躅花正に盛りにて紅白燃ゆるが如し」など、庭園で四季折々の花を愛でる様子も頻出する。田男爵邸は、敷地東側の高台上に邸宅が建ち、西側の斜面地を含めた広大な敷地が庭園となっていた。この庭園は、当時玉川村の花名所となっていた。

“花の玉川村”

ここに玉川村の名所旧跡を紹介した二つの冊子がある。ひとつは大正四年（1915）に発行された『東京西部天然公園 玉川村の棠』（以下『棠』、【図1】）、もうひとつは昭和九年（1934）の『玉川沿革誌』（以下『沿革誌』）である。それぞれ「花の玉川村」、「花と摘草の玉川」という章の中で、村内の花名所を紹介している。たとえば『沿革誌』には次のようにある。



【図1】『東京西部天然公園 玉川村の棠』

桜 古来より玉川は桜の名所である。瀬田第一遊園地附近、上野毛町稻荷坂附近、野毛町六所神社境内の吉野桜、田男爵邸内の八重桜（牡丹桜）等は杖引く花見客をして自ら瓢を傾けしむる。（中略）

躑躅 遊園地境内、田男爵邸内、^(最カ)景も有名で田邸内には丈余のものがあり四季咲、八重、色も赤、萼、白、紅白斑入もの等数百本に達する。尚田家には東都数ヶ所の一に属する有名な藤が三本ありて、百数十間の地積に拡がってゐる。

このように、田邸は瀬田の第一遊園地などと並んで名所として紹介され、とりわけ桜と躑躅、藤で有名だった。

玉川村内にはこの他にも多くの花名所があった（【図2】）。たとえば『棠』には上野毛の桜楓園や、玉川電鉄が経営する菖蒲園、用賀の鈴木氏梅園、多摩川沿岸の桃林、奥沢の鶯草などが取り上げられている。また『沿革誌』には新たな花名所として、大正の終わり頃に誕生した玉川温室村や東京府立園芸学校²近在の園芸家たちが登場する。

こうした中で、田邸が約20年を隔てたこの2冊に変わらず紹介されていることは特筆に値しよう。なお大正七年に閉園となった菖蒲園の菖蒲は、その一部が田邸に贈られている³。

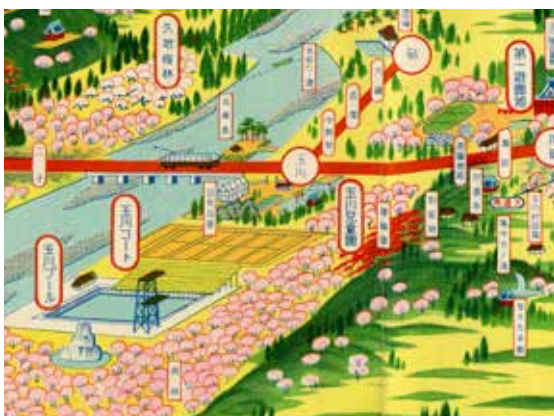
長岡安平と田中筑後

既に指摘されているように、田邸の庭園設計には、東京府などの職員として公園設計を担当した著名な造園

1 明治39年から昭和5年にわたる日記。国立国会図書館憲政資料室蔵。原本は漢文で書かれているが、尚友倶楽部・櫻井良樹編『田健治郎日記』1～7（芙蓉書房出版、2008～2018年）に読み下し文で翻刻されている。本稿での引用はこれによる。

2 東京府立園芸学校は、明治41年、玉川村に隣接する駒沢村深沢に花卉園芸や蔬菜・果樹栽培等の専門教育機関として開設された。

3 田の日記、大正7年5月5日条より。



【図2】玉川電車沿線案内(昭和2～4年頃)部分
第一遊園地や桜楓園、桃林などが描かれている。

家・^{ながおかやすへい}長岡安平や、地元の名士であった^{たなかちくご}田中筑後が関わっていた。とりわけ田中の名前は日記に再三登場し、田中が関与している庭園関係事項を拾い上げると、当時の庭園の様相が浮かぶようである。その一例を挙げれば、植樹の監督、温室の新築設計、藤棚の復旧、池塘の拡張工事、地下冷蔵室の改修、小径の開鑿、花壇の設計、盆栽棚工事の指揮、瀑布の築造といった具合である。

田中は旧上野毛村の戸長や東京府会議員などを務めた人物で、茶室や庭園に造詣が深かったとされる⁵。田邸の隣にあった桜楓園(現在の上野毛自然公園)と呼ばれる桜の名所を設計した人物でもある。

庭園を訪れた人々

一個人の私的な庭園がどの程度一般に開放されていたのか不明だが、日記には「園内桜花七八分開き、来園観光する者少なからず。」(明治39年4月5日)をはじめ、多くの来園者があったことが記されている。また国賓を接待する場や、学校行事(運動会)の会場として貸し出されることもあった。大正十年(1921)に行われた陸軍特別大演習では、東宮裕仁(後の昭和天皇)が田邸に滞在しており(【図3】)、その際の東宮お手植えの松は今も五島美術館庭園内に残る。

また、大正12年5月には、府立園芸学校の生徒約100名が教員に連れられて庭園を見学している。この当時、園芸学校の3年生は春と秋に造園の授業の一環として、著名な庭園見学を行っているの、その対象として田邸が選ばれたのだろう。

さらに田邸では農商務省が管轄する興津農事試験場から新種の果樹(桃、梨、ブドウ)を取り寄せたり、試験場の技師による接木術を試している。接木を行った翌年には、技師がその結果確認に来ている。

こうして、田邸の庭は単なる一私人の庭園というだけでなく、玉川村内の花弁栽培家や、隣村の園芸学校とも相互に作用し合いながら、園芸の盛んなこの地域を構成したと考えられるが、この地域の花弁園芸や果樹栽培の話となれば、それはもはや「特別展余滴」などではなく、ひとつの大きな研究テーマとなるのである。

(当館学芸員 角和裕子)



【図3】田邸における大演習司令官の御召
(特別大演習統監部編『大正十年特別大演習写真帖』1926年より)
高台上に藤棚、遠景には多摩川が流れる。

4 青柳憲昌、建文・建築文化研究所編著『世田谷区文化財調査報告集23 古経楼・富士見亭の建築と意匠』(世田谷区教育委員会、2014年)。本書では、当時まだ翻刻されていなかった田健治郎日記を用い、五島美術館庭園内に現存する古経楼の沿革や庭園絵図の調査を行っている。

5 註4前掲書、14、65ページ。ご子孫への聞き取り調査による。

調査報告

屋根裏に眠る千枚札 中間報告

はじめに

令和3年(2021)8月、梅丘の旧家宇田川敏一家主屋の建築調査中に屋根裏から大量のお札が発見された。お札は木箱5個、一斗缶1個、段ボール4個に詰められており、この他に筍掘り、鋤、万能が一緒に置かれていた。この存在については宇田川家のご家族も全く知らず、農具の埃の状況からも数十年前に置かれたと推測される。

このような千枚(大量)のお札を屋根裏に置いたり、柱に縛り付けたものを俗に「千枚札」と呼び、火伏せ、あるいは雷除けと各地で伝承されている。同様の事例は、群馬・栃木・埼玉・東京・千葉・神奈川など関東一円のみならず、兵庫・鳥根などでも発見されている。世田谷区では喜多見旧加藤家に次いで2例目である。郷土資料館はこのお札を一旦借り受け、整理を行っている最中である。今回はその概要とお札の年代について述べる。

宇田川家概要

宇田川家の位置する地域の旧字名は久保であり、地名の由来は地形の窪地から来ていると考えられている。『新修世田谷区史』によると、渋谷宇田川に根拠をおき、宇田川を姓とした一族は世田谷吉良氏に仕え、久保の地に居を定め、土着したとする。久保稲荷の『祭典覚書』を見ると少なくとも大正末期から昭和初期にかけて久保には10軒程の宇田川家が存在する。中でも宇田川敏一家は位牌や墓石から享保年間(1716～1735)まで遡ることができ、その一族である可能性は高いだろう。

整理方法

お札を整理する前に、箱の中身を全てとり出しクリーニングを行った。紙を好んで食べる紙魚がどの箱にも入り込んでいたためである。それから箱ごとに番号を振り、木箱をA～E、一斗缶をF、段ボールをG～Jとした。箱の中から順にお札を取り出して通し番号を付け、番号ごとに撮影した。同一の銘文・形状のお札は一括して同番号とし、点数でカウントした。また、新聞紙でくるまれたり、紐で括られた塊にはブロック番号をa、b、c・・・と付けた。最終的に、「箱番号—ブロック番号—通し番号」で表した。

お札の概要

お札は現在整理中で、番号、記録、発行した社寺、願主、年代等をリスト化したところである。現時点で、総点数は2548点、うち60点は獣害でほぼ判別できないため、リスト化出来たのは2488点である。また、この他に領収書、新聞、絵葉書、掛け軸など117点が入っていた。以下、リスト化された2488点のお札について概要を述べる。

お札を発行した社寺は、北は青森、南は宮崎までとかなり広範囲にわたり、132の社寺が確認できた。最も多いお札は武州御嶽神社の369点である。次いで赤堤山善性寺228点、大山阿夫利神社165点、成田山新勝寺164点、世田谷八幡宮158点であり、上位5つの社寺で全体の4割強を占める。

地域別で見ると、世田谷区内では9つの社寺から501点のお札が確認された。すなわち善性寺228点、世田谷八幡宮158点、豪徳寺45点、杓子稲荷神社37点、常在寺24点、西澄寺3点、勝國寺2点、東覚院

2点、無量寺2点である。

関東地方では東京都546点(世田谷区を除く)、神奈川県271点、千葉県186点、埼玉県71点、群馬県97点、栃木県91点、茨城県2点、計1264点であり、全体のほぼ半数を占めた。

年代の考察

千枚札は家の建て替えや取り壊しの際に偶発的に発見されることが多い。そのため、集め始められた年代、屋根裏に上げられた年代はお札の情報から推測せざるを得ない。その際に年代が記されたお札や願主などを整理することで、少しでも時代性を明らかにすることができよう。

2488点のうち、年代が確認出来たのは60点、また、社寺の名称や願主とその年齢から年代を推定出来たのは40点、合計100点である。それを箱ごとに集計したのが表1である。

その中で最も古いお札はEの明治8年(1875)に富士浅間神社から発行されたもの、最も新しいお札はHの昭和58年(1983)に武蔵御嶽神社から発行された太占祭の豊作の結果表である。

次に箱ごとにお札の年代を見ると、ある程度まとまっている箱が多いことに気がついた。AとDは1930年代後半から1950年代、Cは1930年代、Fは1920年代、Iは1960年代、Hが1970年代後半～1980年代である。

また、年代ごとにお札の点数を数えると、1920年代が19点、1930年代が17点、1910年代が15点、1920年代とその前後に集中している。(表2)

願主にも注目してみよう。願主は宇田川留吉から5代に亘って代々の当主と妻、息子達などが登場し、偏りがあった。留吉(1845～1915)3点、兼蔵(1876～1960)92点、利助(1899～1970)97点、信敏(1933～2019)68点、敏一(1965～)5点であった。

さらに、この5人の名前がどの箱に入っているか整理したところ、留吉はEのみ、兼蔵はA～G、利助はA・B・D・E・G・I、信敏はD・G・H・I・J、敏一はH・Iであった。

以上の考察をまとめると、お札は主に兼蔵と利助が1920年前後に集めたと推測され、箱を年代順に並べると、表3のようになると思われる。

お札が屋根裏に上げられた時期についても検証しておこう。主屋は、大正11年(1922)

11月13日に木匠池田久五郎によって、茅葺きから瓦葺きの主屋へ建て替えられたことが棟札と聞き取りから判明している。そこから遡ること約50年前のお札が残っていたということは、大正11年以前にも何らかの形で保存され、建て替えた際に木箱に詰められ屋根裏に置かれた可能性が高い。また、段ボールに入ったお札は年代が比較的新しいものが多く、利助か信敏の代に順次屋根裏に上げられたと思われる。

表1

| 箱 | 点数 | 記銘 |
|----|------|-----|
| A | 79 | 5 |
| B | 615 | 5 |
| C | 273 | 15 |
| D | 190 | 13 |
| E | 225 | 17 |
| F | 248 | 18 |
| G | 311 | 5 |
| H | 202 | 14 |
| I | 275 | 8 |
| J | 70 | 0 |
| 合計 | 2488 | 100 |

表2

| 年代 | 点数 |
|------|-----|
| 1870 | 4 |
| 1880 | 0 |
| 1890 | 1 |
| 1900 | 1 |
| 1910 | 15 |
| 1920 | 19 |
| 1930 | 17 |
| 1940 | 5 |
| 1950 | 12 |
| 1960 | 9 |
| 1970 | 12 |
| 1980 | 5 |
| 合計 | 100 |

表3

| 箱 | 確認できた年代 | 願主 |
|----|-----------|----------------|
| E | 1875～1929 | 留吉、兼蔵、ぎん、利助 |
| B | 1897～1923 | 兼蔵、ぎん、利助 |
| F | 1924～1929 | 兼蔵 |
| C | 1930～1936 | 兼蔵、ぎん |
| A | 1938～1956 | 兼蔵、利助 |
| D | 1939～1954 | 兼蔵、利助、信敏 |
| G | 1953～1974 | 兼蔵、利助、もと、信敏 |
| I | 1961～1968 | 利助、もと、信敏、高子、敏一 |
| J | | もと、信敏 |
| H | 1975～1983 | 信敏、高子、敏一 |
| 合計 | | |

おわりに

以上、宇田川家のお札について概観したが、まだまだ整理中の段階である。今後はこの考察を踏まえ、さらに詳細な分布や講中について調査を進めていきたい。

最後に宇田川家には貴重な資料の借用を快諾して頂き、ここに謝意を表したい。

(当館学芸員・松浦瑛士)

主要参考文献

時枝努「守札と信仰——農家における守札の存在形態——」(『民具マンスリー』20-12) 1988

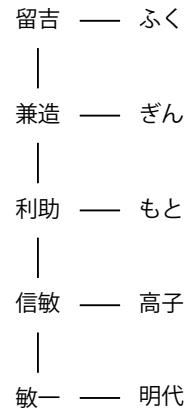
吉田純子「資料紹介② 徳丸・田口家の神札資料について」(『いたばし区史研究』第2号) 1991

宮代町教育委員会『宮代町史資料 第9集 祈りの札』1996

根津知美「千葉県野田市瀬戸寺田家守札に関する調査中間報告」(『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』) 2003

恵津森智行「屋根裏の札」(『甦った古民家第4輯 養蚕農家—世田谷区指定有形文化財 旧加藤家住宅主屋保存の記録・農村の酒屋—世田谷区指定有形民俗文化財 旧城田家住宅主屋保存の記録』) 2005

宇田川家家系図





駒沢電気館プログラム「DENKIKAN WEEKLY」



駒沢電気館プログラム 「DENKIKAN WEEKLY」

編輯兼発行人 山本晋幹
発行所 三軒茶屋 電気館
発行日 昭和9年9月20日/27日
10月4日/25日/11月8日/15日/
22日 昭和10年2月14日/21日/
5月8日/15日/30日/10月17日
両面印刷二つ折り4頁
縦 19.6cm×横 13.6cm (四六 32 切)
13点

はじめに

三軒茶屋は映画の街だった。三軒茶屋映画劇場・三軒茶屋中央劇場・三軒茶屋東映(三軒茶屋キネマ)。玉川通りと世田谷通りが分岐する三叉路の内側にあった3館がよく知られている。ここで紹介する駒沢電気館は、三軒茶屋映画劇場の前身にあたり、戦前・戦中を通じて、世田谷区域で唯一の映画館だった。

今回、三軒茶屋中央劇場の劇場主であった山本一雄氏にお話を伺うことが出来た。一雄氏の父・精一氏は駒沢電気館の二代館主である。

その時の取材内容と一雄氏にご教示していただいた文献などから、まずは駒沢電気館の概要をみてみたい。

世田谷初の映画館

駒沢電気館は日活の系列館として駒沢村上馬引沢 158 に開設された。開館は大正 14 年(1925) 7月 15 日。初の映画スター、尾上松之助の映画で幕を開けたという。劇場は木造三階建て、1階・2階に客席があり定員は 469 名。ステージが広く、下に伴奏用のピアノが置かれていた。

開設者の山本善太郎氏は上馬引沢の旧家の四代目、それまで花卉や果物を栽培する園芸農家であった。また、善太郎氏は昭和 2 年(1927) に仲見世百貨店(後のエコー仲見世商店街)を開設している。駒沢電気館の経営は、昭和 3 年頃より長男の山本精一氏が担当するようになる。

当時は無声映画が上映されていたため、駒沢電気館には主に時代劇を担当した中沢喜風と現代劇の桜井東洋ら 3 名の活動弁士²、2 名の見習い弁士がいた。伴奏は楽長と楽団 4 人、お囃子に太鼓・鳴り物と三味線、ただ費用が嵩むため、通常はレコード演奏だったという。



『三軒茶屋六軒店ニュース 第 8 号 夏の御案内』 昭和 31 年 7 月発行

写真上:三軒茶屋六軒店後案内図(部分) 中央劇場・東映・第一映画・三映劇場、4館が並んでいる。玉川通りに面する三映劇場(三軒茶屋映画劇場)の位置に駒沢電気館はあった。玉川電車の軌道が描かれている。

写真下:6商店の宣伝用のパンフレット。表紙裏と各頁の下部が、東映(三軒茶屋東映)7月の上映案内になっている。



1 『世田谷区勢総攬』では大正 13 年開設となっている。

2 恵比寿寿国館プログラムに、中沢喜風(大正 14 年)、桜井東洋(昭和 2 年)が説明員(弁士)として掲載されている。



駒沢電気館

昭和13年9月1日撮影

駒沢電気館前での出征兵士壮行の記念撮影。出征する山本嘉平氏は、善太郎氏の次男で、精一氏の弟。嘉平氏は昭和17年に中国で戦病死している。

前夜からの台風で、写真中央の白い大きな看板が壊れ、「日活他社優」から左側が吹き飛んだ。上の三つの窓も破損している。

提供 山本一雄氏

三軒茶屋の駒沢電気館

駒沢電気館の名は、明治36年(1903)に浅草に開設された初の常設映画館「電気館」に倣い、開設時の住所から「駒沢」を冠している。昭和7年(1932)10月、世田谷区の成立により、住所が三軒茶屋町に変わった後は、登記名は駒沢電気館のまま、「三軒茶屋 電気館」と名乗ったようである。当館所有のプログラム(昭和9・10年)とチラシ(昭和12年)に駒沢の文字はなく、電気館のロゴに小さく三軒茶屋と記されている。

昭和9年8月、説明見習者(活動弁士見習)1名の解雇取り消しを求め、中沢喜風ら5名の従業員がストライキを行っている。解雇の理由は、見習者が組合運動に熱中し、説明者免許³を取得出来ずにいることであった。争議は見習者に見舞金を支払うことで二日後に解決している。この時の史料⁴により、当時の従業員が19名(男7・女12)であったことがわかる。

三軒茶屋映画劇場

昭和17年8月、大改修工事を経て「三軒茶屋映画劇場」と改称する。最初の上映作は小津安二郎の「父ありき」(松竹)。この年、戦時統制により映画製作は東宝、松竹、大映3社に限定、配給業務も一元化される、すべての映画館は紅白2系統に編成される。配給作品の冒頭には「撃ちてし止まむ」などスローガンが表示されるようになってゆく。

昭和20年5月25日、山の手大空襲により焼失。猛火が辺り一面を焼き尽くし、すべてが真っ白だったという。開設時からの興行記録もこの時失われてしまった。昭和21年7月、同所にて再建、大映作品の上映で営業を再開した。昭和27年7月16日、三軒茶屋町姉妹館の世田谷中央劇場(後に三軒茶屋中央劇場)が開場する。松竹系の封切館だった。



「最新世田谷区明細図」(部分)

昭和10年11月5日発行

下は駒沢電気館の住所表記の変遷
 大正14年7月 駒澤村上馬引沢158
 同年10月 駒沢町上馬158
 昭和7年 世田谷区三軒茶屋町158
 昭和43年 三軒茶屋2-13-20



駒沢電気館チラシ 昭和12年

3 大正6年の「活動写真取締規則」により免許制となり、9年より試験が行われた。

4 法政大学大原社会問題研究所 「駒沢電気館労働争議二関スル件」

昭和九年十月二十五日号 上映「平太郎剣法」
「夢の中のお嬢さん」
「すてつり勘兵衛」



DENKIKAN WEEKLY

映画館プログラムは、各映画館が上映作品を宣伝するため観客に配布していた印刷物。上映作が通常週替わりであったため、毎週発行されていた。

今回紹介するのは、駒沢電気館が昭和9年9月から翌10年10月までに発行した13点(9年が7点、10年が6点)、13週間分のプログラムである。発行所は前述のとおり駒沢ではなく「三軒茶屋 電気館」となっている。編集兼発行人は山本晋幹、一雄氏によれば「山本晋幹」は精一氏のペンネームであろうとのことである。上映作品の更新にあわせて、発行日は木曜日(一部水曜日)となっている。

形態は二つ折り4頁のリーフレット。表紙に電気館のロゴがあり、開くと左上に「DENKIKAN WEEKLY」と記されている。その見開きに上映中の作品の梗概(あらすじ)・キャスト・スタッフとスチール写真、表紙・裏表紙を中心に、次週上映作品と近日公開作を掲載している。

映画以外では、休憩演奏で使用するコロムビアレコードの情報が載る。これは広告を兼ねているのだろうか。曲名に流行歌・ジャズソング・ダンス音楽・ギター尺八四重奏・ハーモニカ合奏などと細かく併記されているのが面白い。落語(柳家金語楼の「逆さま」)も使われている。10年5月22日には関東花形浪曲大会が開催されている。当日、昼は映画上映、夜6時から浪曲大会。東武蔵ほか8名出演している。9、10年とも10月の当該週には、世田谷区健康週間の広告を載せている。駒沢電気館は世田谷警察署主催の衛生映画の上映会場にもなっている。

それでは掲載されている映画を見てみよう。駒沢電気館は日活の系列で、日活が製作する映画と、同社が提携する、片岡千恵蔵・嵐寛寿郎・入江たかこなどの個人プロダクションの作品を主に上映している。他に、数は少ないが洋画もある。猛獣生捕大映画「パンジャ」と大河内伝次郎大殺陣「噴祭三度笠」、「類猿人ターザンの復讐」と「水戸黄門 密書の巻」など、当時話題の洋画が時代劇の人気作との組み合わせで公開されている。劇映画以外ではボクシングの試合、ピストン堀口対小池実勝「リングの十字火」、



休憩演奏(昭和9年9月20日号)

松平晃は前年サーカスの歌が大ヒット、「花嫁日記」他多くの映画に出演。

覆面歌手としてデビューしたミスコロムビアは、多くの映画主題歌をヒットさせている。本名松原操。

マドレーヌ藤田は画家藤田嗣治の4番目の妻。



「花嫁日記」(昭和9年11月8日号)

監督:渡辺邦男 杉狂児と市川春代。
多摩川撮影所初のトーキー作品。



右:片岡千恵蔵プロ「血煙天明陣」

左:嵐寛寿郎プロ「銭形平次捕物控 紅蓮地獄」(9年9月27日号次週予告)

1 精一氏は「駒沢太郎」のペンネームでプログラムを編集していたと語っていた。

2 大正末頃より、多くのスターが独立プロダクションを設立、自らの主演作を製作していた。



世界重量拳闘選手権争奪試合「カルネラ対ベア」もある。

1930年代、日本映画はサイレント（無声映画）からトーキー（発声映画）へと移行していく。昭和7年（1932）日活はWE社と提携、翌8年にウエスタン・エレクトリック方式によるトーキー「丹下左膳」（伊藤大輔監督・大河内伝次郎）を公開する。観客は大河内伝次郎の豊前なまりを聞いた。有名なセリフ「しゅーは丹下、名はしやぜん」はここから生まれている。

移行期には、サイレントに音楽だけを収録したサウンド版も作られる。プログラムにこれら三種の映画が混在している。溝口健二監督作品の「愛憎峠」（1934）はサウンド版、翌年の「折鶴お千」（1935）は弁士の解説も収録した日本独自のサウンド版で、解説版と呼ばれた。

ニュース映画も併映されるようになっていく。所蔵するプログラムの中では9年11月8日号に「朝日世界発声ニュース」が登場、10年のものにはすべてに「発声ニュースは毎週上映致します」と記されている。トーキーへの移行と、昭和6年の満州事変がニュース映画の活況をもたらしたといわれる。11年にはニュース映画専門の劇場も誕生している。テレビのない時代、人々は映画館でニュースを見た。

空襲で失われた三軒茶屋の映画館の興行記録、そのほんの一部を、わずか13週分ではあるが、これらのプログラムによって知ることが出来る。ここには、近日公開一覧を含めて80以上の映画が掲載されているが、残念なことに作品の多くが失われ、現在では観ることができない⁴。日本映画最初の黄金期とされる1930年代、残された数少ないフィルムによっても、そのことを確認することは出来るだろう。

※プログラムは、令和4年度中に世田谷デジタルミュージアムで公開を予定している。

（歴史専門調査員・上原智）

3日活は先に、砧村に設立された写真化学研究所（PCL）と録音契約を結ぶが、同年中に解約。このためPCLは自ら映画製作を開始、これがやがて東宝へと発展していく。

4東京国立近代美術館フィルムセンターによれば、1930年代の無声映画の残存率は11.7%、戦前の溝口健二監督作品は8割が失われている。

主要参考文献等：佐久本武雄・長山長『世田谷区勢総攬』1934 区勢調査会／『日活四十年史』1951日活株式会社／川部修詩『活狂エイガ学校』1987 静雅堂／『せたかい』第52号 2000 世田谷区史研究会／『写真が語る 世田谷区の100年』2020 いき出版／近藤和都『映画館と観客のメディア論』2020 青弓社
法政大学大原社会問題研究所 協調会資料第2集 「駒沢電気館労働争議二関スル件」



丹下左膳大会(昭和10年2月21日号)
日活特作短期名画大会として丹下左膳大会を4日間、弥太郎傘大会を3日間開催。人気作の再上映であろう。



愛憎峠(昭和9年9月20日号)
監督：溝口健二 夏川大二郎 山田五十鈴 サウンド版



お千代傘(昭和10年5月30日号)
監督：尾崎純 高津愛子 尾上菊太郎 宮川一夫カメラマンのデビュー作

蠅取デーと防疫対策



写真1 防疫強調週間 チラシ

「資料館だよりNo.73」では、自動蠅取器「ハイトリック」について紹介したが、今回もまた、蠅とそれに関わる話である。皆さんは、かつて「蠅取デー」という、捕った蠅の数を競い合うある特別な一日があったことをご存知だろうか。

左の史料は、当館に寄贈された世田谷区野沢町1丁目町会資料「昭和十二年度町会ニ関スル書類」の一部である。昭和12年(1937)7月に出されたこのチラシには、7月20日が「蠅捕(取)デー」となっている(以後、蠅取デー)。

では、この「蠅取デー」とは、どのようなものだったのだろうか。

日本では、特に文政5年(1822)コレラが海外から入って以降、様々な伝染病が流行を繰り返した。明治30年(1897)には伝染病予防法が公布され、コレラ・赤痢・チフス・^{ほうそう} 瘡疹・^{しょうこうねつ} 猩紅熱・ジフテリア・ペストの8種が伝染病に指定された(大正11年<1922>にはパラチフス・流行性脳脊髄膜炎が追加)。

これらの伝染病は、下水道の不備や尿尿・塵芥(ゴミ)の処理方法に原因があるとされ、その媒介虫としての蠅が駆除の対象となった。もともと蠅の根絶運動は、20世紀初頭にアメリカで始まったというが、日本では大正9年(1920)、大阪で初めて蠅取りデーが行われた。

そして、大正12年(1923)の関東大震災後、東京では家屋や都市のインフラが破壊され、バラックが増えるなど衛生状態が悪化した。それによって蠅が大発生したことから、大正14年(1925)東京市全域で8月15日を蠅取りデーとし、一斉駆除が行われた。それが、昭和2年(1927)には7月20日に行われるようになった。

世田谷の蠅取デー

世田谷でも、昭和5年、世田谷町(下北沢、代田、池尻、三宿、太子堂、若林、世田谷、経堂在家)で7月中に蠅取デーを実施し、506,211匹の蠅を捕獲したという記録が残っている(「昭和5年東京府荏原郡世田谷町事務報告書」)。町内全戸に対しては「クレシン」¹ 散布し、さらに、伝染病予防衛生講話と活動写真会も7回開催している。関東大震災後人口が著しく増加した世田谷は、宅地化によりゴミや尿尿の排出量が増加した。その一方、農地が減少したことで下肥の消費も減り、その処理に苦慮していたのである。

さて、冒頭のチラシ【写真1】に見えるように、昭和12年は7月20日が蠅取デーである。

このチラシの裏面には、野沢町1丁目町会の町会員向けに「御願」が印刷されている。その内容は、「捕獲

1 クレシンとは、明治34(1901)年に東京瓦斯株式会社で製造販売された消毒薬。黒褐色の濃い液体でタールのような臭いがして、原液を水で薄めて使う

した鼠は18日、蠅は20日の午後1時～6時まで指定のお宅に届けること。捕蠅100匹以上(鼠は1匹でも)の方には賞品を差し上げる。多く捕った方には賞品も沢山差し上げることになっている。当町は他の町に比べて伝染病の発生が非常に多いので、鼠や蠅を皆様の力で撲滅しよう」というもの。その結果、蠅取デー参加者72名、捕蠅数21,900匹。

町会員の参加率は1割弱(同年の町会費から推定すると会員数は約780世帯)。最も多く蠅を取った人は5,000匹だった。この数が多いか少ないかというと、何とも言えないが、直近数年間の世田谷の捕蠅数を示すと

【表1】昭和7～11年世田谷の捕蠅数・清潔方法施行戸数・伝染病患者発生数

| | 昭和7年 | 昭和8年 | 昭和9年 | 昭和10年 | 昭和11年 | |
|--------------|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------------|
| 捕蠅数 | | 1,583,563 | 1,000,893 | 1,372,500 | 1,168,117 | |
| 清潔方法施行戸数 | 30,210 | 35,207 | 31,499 | 34,961 | 38,421 | |
| 区内世帯数 | | 35,810 | 38,220 | 38,780 | 44,700 | |
| 発生数 伝染病患者 | 赤痢 | 107 (5,458) | 155 (7,793) | 188 (7,679) | 268 (9,234) | 277 (10,715) |
| | 疫痢 | 169 (5,642) | 177 (6,671) | 161 (6,095) | 166 (6,885) | 171 (7,308) |
| | 腸チフス | 91 (3,097) | 79 (3,140) | 94 (2,615) | 69 (2,307) | 55 (2,098) |

【表1】のようになる。

この時の賞品は、次のようなものだった。

- 1等 400匹以上 タオルとドロップ1
- 2等 300匹以上 テフキ(日本手拭)とドロップ1
- 3等 200匹以上 キャラメルとドロップ2
- 4等 100匹以上 ドロップ3
- 5等 100匹以下 ドロップ2
- 等外 タオル1、キャラメル1、ドロップ1

捕蠅数に応じて1～5等まで賞品が用意されており、さらに「等外」も用意されていた。ちなみにこの頃の物価を見てみると、タオル1枚29銭2厘(昭和12年)、キャラメルはグリコが1箱11粒入りで5銭(昭和12年)、サクマ式ドロップスはポケット用が2銭あるいは5銭(昭和10年)だった。

また、同年太子堂町会では、「捕鼠デーには1疋3銭で買上げ、捕蠅デーには水無飴を差し上げる」と宣伝をしている。この当時、たい焼きが1つ3銭。水無飴というのは、東京・三田の今村製菓株式会社が明治40年頃から製造していた飴で、現在の「ボンタンアメ」のような物と思われる。

大人も子どもも、賞品目当てに蠅取りにいそしんだことだろう。懸賞品によって人々のモチベーションを上げることで、蠅の撲滅につなげようとしたことが容易に想像できる。

防疫強調週間

このように、蠅取デー、捕鼠デー、消毒清潔デー等、あらゆる防疫対策を講じて来たにもかかわらず、昭和12年は赤痢・疫痢は増加傾向にあり【表1】、市民への更なる衛生指導や予防思想の普及が急務とされた。また、3年後のオリンピックや万国博覧会等、国際的事業の開催に向けて、市民挙げての協力が求められた。そこで、東京市は7月14日～20日の1週間を「防疫強調週間」とし、世田谷でも様々な催しが実施された【写真1】。特に、疫痢は幼児の赤痢なので、児童や母親に向けて防疫に関する指導・訓練を行うことがより効果的と考えられ、「母の会」や「児童劇の夕」が何度も開かれている。

なお、このチラシには掲載されていないが、他にも7月14日には日比谷公会堂で防疫強調大講演会、同17日には日本橋白木屋ホールで特別講演会が開催されている(「東京市広報第2874号附録 保健通信No.20」〈昭和12年7月30日〉)。各会とも、講演後には映画の上映やマジックショーなど、市民向けに盛大な

余興が催されている。当時人々にとって映画は最高の娯楽だったので、こういう機会を捉えての衛生映画上映には絶大な宣伝効果が期待できたのだろう。

この他にも、防疫対策として次のような週間運動式のものが行われていた。

清潔方法【写真2】

清潔方法とは、明治30年代に警視庁令等によって定められたもので、宅地や家屋内外の掃除、屋内の建具・什器等の日光消毒、湿った床下の乾燥や薬剤散布、汚水溜まりの排水等が義務づけられた。実施時期や回数は度々変更されたが、右の通知が出された昭和12年には、4月10日～10月末日の間に1回実施することになっていた。

世田谷では5月3日～22日の内の18日間、区内を18区域に分け、指定された日に清掃を行っている²。清掃を実施した当日は午前10時頃から検査があり、その実績を東京市に報告している。【表1】を見ると、世帯数対して施行戸数が約8～9割と、高率で推移していることがわかる。

写真2 清潔方法施行通知 チラシ

健康週間【写真3】

健康週間は、市民の保健衛生への関心を喚起させ、健康増進・体位向上を図るために行われた教化運動である。昭和5年全国的に施行され、東京市も同年以降毎年実施している。

世田谷でも、「資料館だよりNo.73」で紹介した桜小学校の学校日誌に、昭和5年10月4日、昭和6年10月16日、昭和7年10月24、25日に健康週間関連の記述がある。また、8頁掲載の三軒茶屋電気館のプログラムには、健康週間の宣伝が掲載されており(昭和9年10月22～28日、昭和10年10月15～21日)、例年秋季の



写真3 国民精神総動員健康週間 チラシ

1週間行われていたことがわかる。昭和12年は「三年後のオリンピック大会を目指し、少しでも市街を綺麗にし、訪客に良い印象を与へねばならぬ」という認識のもと、10月13～19日に実施された。10月15、16、18、19日は、第二荏原小学校の他4カ所で映画会が開催され、週間中無料入浴券発行や無料健康相談も行われた。

2 昭和5年は5月17日～6月10日。昭和11年は4月24日～5月13日の内の17日間(施行戸数38,421戸、塵芥量578,000トン)。昭和13年は4月22日～5月9日の内の12日間。(「昭和5年東京府荏原郡世田谷町事務報告書」「昭和11年防疫衛生施設概要」「清潔方法施行通知」〈昭和13年〉)

現在の日本では、上・下水道も整備され、ゴミ収集も定期的に行われているため、「蠅取デー」は必要なくなっているが、一方でコロナ禍も3年目を迎え、日々息苦しい生活を余儀なくされている。伝染病というものは、時代を超えても同じような苦しみを人間に与えるものである。

蠅取り道具

最後に、「蠅取デー」で使われた道具を紹介しよう。(自動蠅取器「ハイトリック」は「資料館だよりNo.73」で紹介したので省略する)



写真4 蠅たたき 12×54 (cm)

最も単純な捕蠅方法。その名の通り、平らな網目の部分で蠅を叩き潰す道具。

現在は網目部分が樹脂性の物が多いが、かつてはシュロの葉や籐、金網でできていた。



写真5 蠅取紙 φ2×70 (cm)

表面にネバネバした薬品が塗ってある紙で、その粘着力で蠅を捕らえる。

明治末には、明礬を塗った半紙を乾燥させ、そこに松ヤニ・亜麻仁油を煮溶かした物を刷毛で塗る、という方法も考案されており、各地で様々な工夫が為されていた。昭和初期には、天井から吊り下げるリボン状の形が開発された。

【参考文献】

『中外医事新報 第591号』(中外医事新報社、1904) / 『東京瓦斯株式会社事業沿革の概要』(東京瓦斯、1905) / 『農家の副業』(日本種苗株式会社編集部、1911) / 『世田谷区勢総攬』(区勢調査会、1934) / 『公衆衛生読本』第1冊(東京市保健局、1936) / 『東京府史』行政篇第6巻(東京府、1937) / 『東京市保健局事業概要 昭和12年12月刊』(東京市保健局、1938) / 『東京都衛生行政史』(東京都、1961) / 『続・値段の明治大正昭和風俗史』(朝日新聞社、1981)「下町風俗資料館 號外」第49号(台東区立下町風俗資料館、2000) / 馬場わかな「日本における赤痢の流行と感染症対策の変遷 1890-1930年」(『三田学会雑誌』第99号第3号、2006) / 森永卓郎監修『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』(展望社、2008) / 多摩美術大学美術館: コドモノクニへようこそ 02: 蠅取りデーとは、03: 蠅取りデーの報奨 http://tokyopasserby.blogspot.com/2013/06/02_03.html (参照日 2022-3-) / 瀬戸口久「ハエのミヤコ 1930年代東京・都市というフィールド」(『生物学史研究』93巻、2015)



写真6 ガラス製蠅取器 φ18×14 (cm)

ドーナツ状の底部に塩水や米の研ぎ汁を入れる。中央の空いた所に皿や紙を置き、砂糖や食べ残しを載せておくと、餌につられたハエが寄ってきて中に入り、ドーナツ状の溝に落ちて溺死するという仕組み。

底部に石鹼水を入れ、魚の腹わたを餌にして庭の隅2ヶ所に置き、1週間で32万匹もの蠅を取った女性の話が昭和14年の新聞に掲載されている(『東京朝日新聞』1939年8月2日)。

(歴史専門調査員・小林信夫)

新収蔵品紹介

久保帯刀筆「桐ヶ谷桜園」について

はじめに

江戸時代後期の幕臣・久保帯刀^{くぼたてわき}という人物をご存じの方が、令和のいま、果たしてどれほどいるであろう。いや、名より「酔桜」や「桜墳」という号の方が、まだ見覚え、聞き覚えのある人が幾分かは多いかもしれない。いづれにしても、今日一般にはまったく知られていない人物である。しかし青山長者ヶ丸、現在の港区南青山4丁目にあった彼の居宅地には、かつて白桜亭（別名・長者ヶ丸桜園／以後、主に桜園又は園と記す）という江戸市中屈指の桜園があり、その園主として当時かなり名の知られた御仁なのであった。この桜園には、どれをとっても評価の高かった桜の名木百136種が植えられていて、毎年庶民を含む多くの人の目を楽しませていたのである。帯刀には絵心があり、「酔桜」「桜墳」の号で自らこの136種の軸装画を制作してもいる。しかし、彼の死後程なくして桜園は閉ざされたといい、帯刀自作の軸装画も、何時の頃にか散逸してしまったようである。だが、幸いにも幾つかは世に伝わっている。ほんの一時存在した名園の桜がどのようなものだったかは、もはや今に伝わる画類や史料の記述などから窺い知る以外に手立てがない。

ところで、この帯刀が園内の桜を描いた軸装画の一つが、近年当資料館の所蔵となった。それは「桐ヶ谷桜」と題す136種の内の一つを描いた桜画である（写真1・2）。いま述べてきたことをふまれば、その資料的価値は少なくないと思われることから、この場において若干の紹介をしておきたいと思う。

久保帯刀と桜園（白桜亭）

まずは久保帯刀という人物及び白桜亭と称した桜園について、三つの文献を参考に紹介しておきたい。刊行年の古い順に、最初は『東京市史稿 遊園篇第三』である。そこには「久保氏園櫻花」の一項が設けられていて、他より引用した久保帯刀や桜園に関する幾つかの言説が記されている。貴重な情報を提供しており大変有り難い。重要な事項を列挙すると、久保邸が丹羽左京大夫中屋敷前（陸奥二本松藩／青山長者ヶ丸）にあること、また、家系に連なる者として延宝年中の久保七兵衛、宝永5・6年の久保伊太夫、嘉永元年の久保栄左衛門の名をあげている。帯刀その人については、雑誌『櫻』所載の武田酔霞「久保桜墳翁の墳墓に就て」を引用して名が勝章、通称帯刀、号を櫻墳、白桜亭と記す。幕府天守番、則ち富士見櫓御宝蔵番務めであること、天明7年（1787）2月28日生まれで卒年が文久元年（1861）5月11日の享年75であったこと、自宅近所の曹洞宗長谷寺に葬られたことを記している。桜園では桜以外にも山茶花や蓮花などを育て、居宅は古いが至極綺麗だったという。園の広さは300坪ほどで（異説もある）、大名のご隠居たちもよく見物に来たらしい。所望する者があれば、草木の鉢植えを払い下げたりもしていたようである。世にありふれた桜は1本もなく、皆希世の奇品名花を誇ったという。桜花満開時に園内へ入れば香氣溢れ、一見桜とは思われないようなものが多かったともある。帯刀の嫡男は栄左衛門で、彼も富士見櫓御宝蔵番を務めており、この職は代々世襲されていたようである。この宝蔵番とは、江戸城富士見櫓にあった宝蔵（貴重な物品を納めておく蔵）の管理を担った職で、旗本の宝蔵番頭を長とした。宝蔵番は御家人格で、お目見え以下のものが就く。よって、久保家の場合も大身の家柄とはいえないが、桜園を営むほどであれば、思いの外羽振りが良かったようにも思われる。なお、園の広さ約300坪とは990㎡程だが、イメージとすれば標準的な公立小・中学校の体育館の広さといったところであろうか。ここに少なくとも136本の桜が植わり、その他に山茶花や蓮花なども育てられていたというから、かなり密な印象を受ける。しかし、見頃の時節になれば種々の桜花が咲き乱れて壮観であったろう。



写真1 久保帯刀筆「桐ヶ谷桜図」

芳香も満ち満ちていたらしく、気分爽快でさぞ居心地がよかったに違いない。これらの桜はその全てが維新後、子の栄左衛門によって駒場の御薬園へ移されたという。周囲からは、かなり惜しまれたようだ。

次に三好學氏の『櫻』があげられる。そこでは「長者ヶ丸桜園」という一項を設け、この桜園と園主帯刀について、これも比較的詳しく述べている。同書によれば、文政天保頃、数ある江戸の桜園で最も名高く、やはり邸内に設けられていたとしている。帯刀は名が原章（『東京市史稿』が引用する『名園記』は「勝章」としている）で、桜顛と号す幕臣であり、園芸を好み、殊に桜を寵愛し、諸方から珍しい品種を蒐集して自園に植え、白桜亭と称した旨を記している。桜園の詳細は不明だが、「長者ヶ丸白桜亭園中百三十六品」と題す一枚摺が存在し、そこから園内に植えられていた品種が分かったという。しかも、これらは古来の名桜や名所の桜で占められていたとある。幕臣とはいえ、民間にもこの桜園を開放していたため、文政から安政にかけて、観桜の時期には多くの来観者で賑わったであろうことは想像に難くない。しか

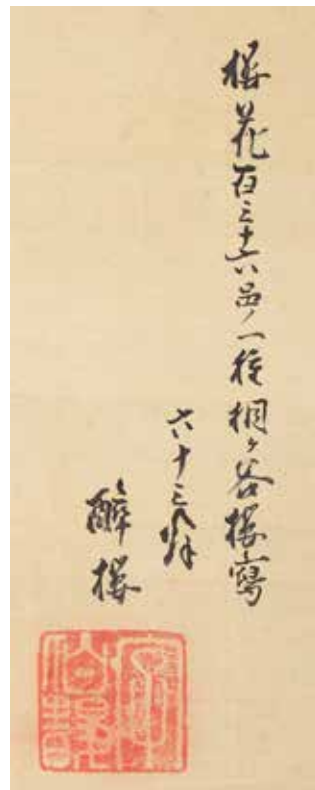


写真2 同 落款印章

し、帯刀没後程なくして幕府が瓦解し、それに伴いこの桜園も閉ざされたと記している。ちなみに、同書には先述した桜 136 種の品種一覧である一枚摺と帯刀筆の「小禄桜図」（軸装画 136 種の一つ）が掲載されている。この園の 136 にのぼる品種の桜は、桜画の名手として知られた坂本浩雪が造園家増田繁亭の依頼を受けて写生しており、江戸画壇の大御所・大岡雲峰も 3～40 種を写生したという。彼らに限らず、多くの画人が足を運び写生にいそしんだに違いない。浩雪の住まいは桜園からも至近の青山六道辻（現在の港区元赤坂 2 丁目で権田原付近）にあった。依頼を受けて作成されたという写生画は、『長者ヶ丸桜譜』と名付けられた画帖に纏められている。また、彼の代表作である軸装の「桜花図」（和歌山市立博物館蔵）も、この園の墨染桜を描いたものである。時に、浩雪の墓はいま世田谷区北烏山の妙祐寺に現存している。なお、帯刀が「酔桜」の号も用いていたことは、年不詳 3 月 27 日に上野不忍池の宝珠院で開催された展覧会に、帯刀が自作の桜品図を出品した際のチラシ招待文に「酔桜」と署名してあったことから判明したという。

三つ目は『森銑三著作集』の続編第三巻である。そこに収載される「広瀬六左衛門雑記抄」には久保桜墳の項があり、記述は僅かだがその人物像が記されている。これは、氏が売り立てて入手した林若樹旧蔵『広瀬六左衛門日記』51 冊の内の第 5 冊（安政 3 年・1856）に記された内容を翻刻したもので、他にない情報も含まれ興味深い。そこから読み取れることを挙げれば、①自宅が青山長者ヶ丸にある、②大名の丹羽屋敷門前である、③御宝蔵番を務める幕臣である、④安政 3 年当時 70 歳だが壮健である、⑤桜園の主としてとても高名である、⑥交友が広く松平定信、増山雪斎、市橋長昭などの諸侯も含まれる、⑦隠号「桜墳」は定信から賜り、増山雪斎の「石墳」に基づいたものらしい、⑧近衛や知恩院門跡といった高貴な身分の者にもその名が知られている、⑨扁額には「日桜亭」とある、⑩ 130 余種の桜を自ら集めた、となる。④から⑨が先の二つの文献にない情報だが、⑨の「日桜亭」は「白桜亭」の誤りであろう。原本が誤記だったのだろうか。ところで、「桜墳」という号の由来は上記のとおり松平定信から賜ったもので、増山雪斎（正賢／伊勢長島藩第五代藩主）の別号「石墳」に倣ったようだが、近世桜画の始祖ともいべき三熊思孝（1730～1794）が「花墳」の号を用いていたことは留意される。この号について今橋理子氏は、「墳」の字義から「花狂い」「花倒れ」、さらに言えば「狂ったほどに桜にのめり込んだ人」という意味を持つと指摘している（今橋『桜狂の譜』）。帯刀の場合も、別に「酔桜」の号さえ用いていた点をも勘案すれば、「桜墳」の号に「花



写真3 安政 3 年の久保邸 (矢印)



写真4 嘉永 6 年の久保邸 (矢印)

墳」と同様の意味内容が含まれていると解して間違いなからう。もっとも、雪斎の「石墳」も同じような意味に違いなく、思孝の「花墳」を持ち出すまでもないのかもしれない。

以上、三つの文献をとりあげたが、ここで帯刀に関連する新知見について少々述べる。『寛政譜以降 旗本家百科事典』第4巻所収の「服部新五郎長右」の項に目を向けると、そこには「服部隼次郎」ともあり、両者同一人物とわかるのだが、この隼次郎なる人物、小普請百俵十人扶持で、屋敷が「青山長者丸」とある。そして、彼の実父が久保栄左衛門、実祖父が富士見宝蔵番の久保帯刀とも記されていたのである。つまり、この服部隼次郎は久保家から服部家へ養子に入った男子で、帯刀の実孫だと分かる。ちなみに青山長者ヶ丸にあった久保邸を安政3年と嘉永6年の切絵図で確認してみると写真3・4のとおりで、服部家はお隣さんであった。服部銀次郎は隼次郎の養父である。だがこの服部邸、両図を見比べると所在位置や広さが異なっている。近辺の各家区画も変動が目立つ。実は土地に着目してみると、久保邸の広さや桜園の位置、他の所有地など少々疑問も浮上してくる。しかし、今はこの点に関する深入りを避けておく。それはともかく、この服部家と久保家が親戚関係とは初耳である。本稿の内容に関係しない些末な事柄とは思いますが、一応ここに触れておく。

桜の品種

作品を見ていく前に、まず桜の品種について説明しておこう。桜は、バラ科サクラ属サクラ亜科の落葉広葉樹である。通常春に開花し、白色や淡紅色、濃紅色の花を咲かせる。野生種は世界に百種程あり、北半球の温帯域を中心に広く分布する。古来より日本文化との関わりは深く、美を愛でる対象としてのみならず、桜の樹皮や材木が、様々な実用品の素材として用いられていることなどはよく知られている。

江戸時代には園芸ブームを背景として、桜に限らず様々な植物の品種改良が盛んに行われたため、品種も数多く誕生している。桜の場合、日本の基本野生種は10種ほどなのだが(ヤマザクラ、オオシマザクラ、カスミザクラ、オオヤマザクラ、マメザクラ、タカネザクラ、チョウジザクラ、エドヒガン、ミヤマザクラ、カンヒザクラ)、これらの変種を含めると自生種は百種類以上になる。さらに室町期頃より目立ち出す改良による栽培品種は、江戸期に至ると200以上にも達した。日本は全国土で桜の育成が可能だが、当然、各地の自然環境に適った品種が誕生している。各種の共通点を簡単にあげておくと、①雌雄同株で、中高木から低木の大きさとなること、②若い樹皮は光沢があって水平方向の皮目ができること、③古木となると皮目が消えて表面から徐々に風化していく、④葉は形が楕円形で縁が鋸歯状を呈す、などである。

では、肝心の桐ヶ谷桜であるが、この桜は、野生種であるオオシマザクラから派生したサトザクラ群の栽培品種である。5～10枚の花びらをつけ、色は淡い紅紫を呈し、一重と八重が混ざる。鎌倉・桐ヶ谷で誕生したことからこの名があるといい、別に鎌倉桜とも御車還(みくるまがえし)とも呼ばれている。なんとも優雅なネーミングが興味をそそるが、いよいよその桐ヶ谷桜を描いた帯刀の画を見ていくこととしよう。

桐ヶ谷桜図について

先述したごとく、この作品は落款から「酔桜」こと久保帯刀が、数えて63歳の時に描いたものであることがわかる。天明7年(1787)生まれであるから、この絵の制作は嘉永2年(1849)ということになる。掛幅装で絹本著色、本紙法量は縦122.2(cm)、横38.5(cm)を計る。款記は「櫻花百三十六品ノ一種桐ヶ谷櫻寫ノ六十三翁ノ酔櫻」、印章は白文方印「字伯静」である(写真2)。見てのとおり、桜樹の全景ではなく、全体の一部分が描かれたものである(写真1)。余計な添景は一切なく、目的の桜樹1本に絞られている。これが「桜画」と称す画の特色でもある。描かれるのは、当然この樹の最も特徴的な箇所、乃至は描き手が好きな箇所のはずである。これは、他の帯刀作品から判断して、この軸装シリーズの桜画に共通する構成法と思われる。奇妙

にくねる苔むした幹は、太めの枝が途中で折れているなど、いかにも老木をイメージさせる。が、その幹より三方へ伸びる若枝やそこに咲く桜花のさまからは、逆に漲る生気が見てとれる。ここからは、樹の老若の対比が強調されているように感じる。筆の運びやバランスを考えた構図などからは、それなりの画学習を積んでいることがうかがえる。葉や花卉の描写はなかなかの出来で、面識があったであろう坂本浩雪からも描法などを習ったかもしれない。「畫としては言はゞ素人で、浩然(=坂本浩雪/筆者加筆)の筆などには到底及ばない」(三好『櫻』)といった手厳しい見解もあるが、特にこのシリーズの桜画には、記録として後世へ伝えたいとの思惑があったに違いなく、極力正確に写そうという意識が強かったのではないだろうか。その点は留意すべきと思われる。本作品の場合、単に巧い下手という観点だけではなく、写真に代わる記録画としての価値や評価も考慮される必要があろう。なお、帯刀が軸装シリーズ以外にも136種の桜花を描いた貼交屏風が『日本の美術に見る展覧会「桜」』に収載されていることを付記しておく。

おわりに

江戸時代後期の青山には「白桜亭」、別名を「長者ヶ丸桜園」という、目の肥えた人々をも唸らせた桜の各種名木が林立する桜園があり、春ともなれば、大名から庶民まで階層の別なく観桜者たちの目を楽しませていた……、そんなスポットが一時存在していたのである。ここに描かれた桐ヶ谷桜の姿は、作品であると同時に、その名園に存在した桜の名木の一端を今に伝える貴重な記録であり、また資料といってよい。

ところで、今橋理子氏が著書『桜狂の譜』で扱った桜画は、三熊思孝を始めとして19世紀前半までの画人、作品に絞られている。しかしながら、実のところ19世紀後半もなかなかどうして見応えある桜画作品が少なくない。作者として、本来医師兼本草家であって専門の絵師ではないが、坂本浩雪をその最たる存在としてあげておく。彼が画技の腕を磨いた修練の場の一つとして、自宅から至近距離にあった白桜亭は無視し得ない。ここで繰り返されたであろう桜の写生は、彼の桜画を魅力ある芳醇な絵に昇華させた一因のはずである。香気を発すると評判だった桜画の制作は、案外白桜亭での体験が主因だった可能性もある。門前市をなしたという浩雪の桜画、その誕生に、帯刀自慢の名だたる桜樹たちは一役買ったと思われる。そんな桜園を営み、自ら桜画制作に励んだ帯刀自身も、この桜狂の譜に連なる特記すべき一人と考えるが如何であろうか。

作品や文献等資・史料の検索はまだ不十分であり検討も中途の段階だが、まずなにより作品入手の周知と作者の紹介が大事と筆を執った。本小文が、こうした桜画制作に狂奔した人たちの今後の作品博搜に、さらには帯刀及び白桜亭に関するよりいっそうの情報収集に一役買えばなによりと考えている。

【主な引用・参考文献】

『東京市史稿』遊園篇第三(東京市役所 1929) / 三好學『櫻』(富山房 1938 復刻版 1980) / 「諸向地面取調書(二)・(三)」(『内閣文庫所蔵史籍叢刊 第15・16巻』所収 1982) / 『日本の美術に見る展覧会「桜」』(朝日新聞社 1989) / 『森銑三著作集 続編 第三巻』(中央公論社 1993) / 白石つとむ『江戸切絵図と東京名所絵』(小学館 1993) / 児玉幸多監修『復元・江戸情報地図 六千五百分の一』(朝日新聞社 1994) / 『江戸の博物図譜 世田谷の本草画家斎田雲岱の世界』(世田谷区立郷土資料館 1996) / 小川恭一編著『寛政譜以降 旗本家百科事典 第4巻』(東洋書林 1998) / 磯野直秀「日本博物学史覚え書 X」(『慶應義塾大学日吉紀要 自然科学』29 2001) / 『近世和歌山の科学者たち』(和歌山市立博物館 2006) / 勝木俊雄『桜』(岩波新書新赤版 1534 岩波書店 2015) / 今橋理子『桜狂の譜—江戸の桜画世界—』(青幻舎 2019)

注) 写真3は『復元・江戸情報絵図』24頁、写真4は『江戸切絵図と東京名所絵』136頁より部分を複写転載し、共に矢印を加筆した。

(学芸研究員・鈴木泉)

令和3年度 教育普及事業報告

世田谷区では地域ゆかりの歴史資料を文化財として保存・活用し、世田谷の歴史・文化を次世代へ継承していく取り組みを進めています。この一環として、当館では社会科見学・出張授業・子ども向けミニ展示など、郷土「せたがや」を学ぶための学習支援を展開しています。昨年に引き続き、今年度もコロナウイルス感染拡大による対応の変更がありましたが、社会科見学等で多くの学校が当館を利用してくださいました。コロナ禍ゆえに、より密な学校連携が求められた一年であり、子どもたちの学ぶ機会を減らさないよう苦慮した一年でした。

(1) コロナ禍での社会科見学・出張授業

代官屋敷・資料館の社会科見学は今年度も密を避け、学年まとめてではなく、クラス毎の巡回をお願いしました。申込みは30校ありましたが、実施できたのは2月の段階で15校のみです。残りのうち延期が8校、中止が3校、3月実施予定が4校となっています。社会科見학을希望する学校は感染状況を予測しつつ予約されますが、昨年度と感染拡大の時期も異なり、実施時期が年度末までずれ込むこととなりました。

このような中、依頼が増えているのが出張授業です。今年度は8校申込みがあり、うち1校が社会科見学からの切り替えです。出張授業は社会科見学と異なり、建物・資料などの実物は見られません。しかし、世田谷の移り変わりだけでなく、学校周辺地域の歴史についても出張授業では詳しく解説します。担当者としては、この地域の歴史解説が重要なポイントだと考えています。子どもたちの中に歴史・文化への関心の芽が少しでも育つよう、身近で理解しやすい題材を用いて解説するよう心掛けています。例えば、昔と今を比較できる地域の写真、特に生活圏の駅や商店街、かつて川だった道などの画像(写真③蛇崩川新道橋)を用いて、自分の記憶・体験から時代を遡ることができるよう工夫しています。解説資料の作成には時間を要するため、実施できる学校数は限られますが、ぜひ一度出張授業も試していただければと思います。



①社会科見学(代官屋敷主屋)



②出張授業(玉川小学校)



③蛇崩川新道橋
(下馬3丁目・現蛇崩川緑道)

(2) ミニ展示「すこし昔のくらしー子どもの学び・遊び」を開催

今年度の夏休みミニ展示は、大正から昭和20年代に使用された通知表、学習ノート、紙芝居、ままごと道具などを展示し、昔の子どもたちの暮らしを紹介しました。世田谷では昭和の初め頃まで畑が残っており、農家の子どもたちは登校前・下校後に家の仕事を手伝い、その合間に遊びました。現代の子どもたちは放課後を家で過ごすことも多くありますが、当時は自然の中が遊び場で、ザリガニや魚、ホタルを捕ったり、石けり、かくれんぼ、竹馬、凧などをして遊びました。休みの日は農作業や子守りなど家の手伝いが大変で、学校がある日の方が楽だったといえます。

今回の展示では、ランドセルも紹介しました(写真④)。ランドセルはオランダ語の「ランセル」(ransel=背

負い鞆) からきた呼び方で、幕末に幕府の洋式軍隊で使用した背囊(背中に背負う四角い鞆) をランドセルと呼んだことが始まりとされます。通学鞆として使われるようになったのは明治になってからで、宮内省立の小学校であった学習院初等科が始まりでした。

写真⑤は、昭和 25 年(1950) に山崎小学校(梅丘 3-9) の正門前で撮影されたもので、野球のユニフォームを着た子どもや、布製のランドセルらしき物を背負っている姿が確認できます。世田谷でいつからランドセルが使用されていたかは定かではありませんが、昭和の初め頃は教科書を風呂敷に包んだり、布製の肩掛け鞆に入れるなど様々でした。服装は、世田谷の農家では、まだ着物に草履、下駄で通学する子どもも多かったといいますが、写真の中にも下駄を履いた少年がおり、戦後も下駄で通学する子どもがいたことが分かります。

来年度は改修工事のため休館となりますが、再開後はまた子ども向けの展示を行う予定ですので、子どもだけでなく、機会がありましたら先生方も昔の世田谷の様子をご覧ください。



④ランドセル(左・布製、右・革製)



⑤山崎小学校(昭和 25 年)

(3) 学芸員による夏休みワークショップを開始

令和 3 年 8 月 8 日(祝)、夏休みワークショップ「折り染めミニ掛け軸作り」を開催しました。当館では夏休みに親子香道教室も行っていますが、今回は子どもの資料館利用促進、文化財の保存・活用の普及を目的に新たに企画したもので、当館学芸員が講師を務めました。コロナ禍のため、事前申込制で人数を制限し、折り染め・ミニ掛け軸制作、昔の道具体験(肥桶担ぎ・火熨斗・炭火アイロン)、代官屋敷・資料館見学を実施しました。



⑥折り染め体験



⑦ミニ掛け軸作り



⑧肥桶担ぎ体験

参加者のほぼ全員が折り染め初体験で、最初は恐る恐る和紙を絵の具につけていましたが、次第に折り方・色のつけ方を工夫し、各々が個性豊かな作品を生み出していました。また、肥桶担ぎ体験においては、今回のワークショップ中メインではないにも関わらず、最大の盛り上がりを見せました。肥桶は下肥(畑で野菜を栽培する際に肥料とした人糞尿)を入れるもので、空の状態でも 10kg あります。小学生には重く、バランスをとるのも難しいため、「肩が痛い!」「重い!」の声が続出しました。それでも何とか持ち上げた姿を保護者の方々が次々とカメラにおさめていました。

コロナ禍で会場・人数などに制限はかかりますが、参加した子ども達からは「昔の道具体験が面白かった」「またやってみたい」という声が上がっていたので、次回は制作と体験の 2 本立てで企画したいと考えています。

(学芸研究員 松本知佳)

令和3年度 主要事業報告

特別展・企画展・季節展

ミニ展示「社寺の守札ー信仰と厄除けー」①

6月19日（土）～7月18日（日）

社寺から発行されたお札には、神仏の霊が宿るとされた。収蔵品の中から嵐除け、雷除け、盗難除けのお札などを紹介。
※展示期間中、7種類のオイヌサマから好きな物を選ぶ「オイヌサマ人気投票」を実施し、320票の投票があった。



①

夏休みミニ展示

「すこし昔の夏のくらしー子どもの学び・遊び」②

7月24日（土）～9月26日（日）

昭和の初め頃まで、世田谷の子ども達は学校に通いながら農作業を手伝い、その合間に遊んだ。今に残る教科書や玩具から、昔の子ども達の暮らしを紹介。
※詳細は21～22頁参照



②

特別展「多摩川と世田谷の村々」③

10月23日（土）～12月5日（日）

渡船、舟運、漁業といった観点から、近世から近代にかけての多摩川と村々の関わりについて紹介。調布市との連携企画として、コラボギャラリートークを開催した。



③

季節展「ボロ市の歴史」

12月11日（土）～1月16日（日）



④

美術ミニ展示「四季耕作図を楽しもう」④

12月11日（土）～1月16日（日）

絵画作品をメインに、江戸時代の各季節に展開された稲作の様子や人々の暮らしぶりを、実際の農具も交えて展示紹介。



⑤

野外歴史教室

| コース名 | 実施日 | 講師 | 参加人数 |
|---|-----------|----------------|------|
| 砦の古墳と国分寺崖線 ※新型コロナウイルス対策のため中止。 | 5月19日（水） | 箕浦絢（文化財係学芸研究員） | —— |
| 吉良氏ゆかりの地めぐり ー駒沢公園通り沿いの旧蹟ー ※雨天のため中止。 | 11月9日（火） | 鈴木泉（当館学芸研究員） | —— |
| 旧馬引沢村の社寺と史跡を巡る ⑤ 下馬地域の旧道を辿りながら、社寺と軍事施設跡を巡った。 | 11月11日（木） | 松浦瑛士（当館学芸員） | 23人 |

講座

| 講座名および実施日 | 講師 | 参加人数 |
|---|------------------------------|---------|
| 民俗学講座 「洗う行為の民俗－日本人と清潔観－」(全2回) 5月20日(木)、27日(木) ※新型コロナウイルス対策のため中止。 | 松浦瑛士(当館学芸員) | — |
| 夏休み自由研究講座 「折り染めミニ掛け軸作り」 8月8日(日) ※詳細は22頁参照 | 松本知佳(当館学芸研究員) 松浦瑛士(当館学芸員) | 14組 25人 |
| 夏休み親子香道教室 8月22日(日) | 公益財団法人お香の会 | 10組 18人 |
| 美術史講座Ⅰ 「庶民目線で見ると近世の宗教美術」(全4回) 11月17日～12月8日の毎週水曜日 | 鈴木泉(当館学芸研究員) | 延 108人 |
| 特別展開連講座「多摩川の絵図を読み解く」 11月23日(祝) 玉川流域絵図(明治4年)と瀬田村・諏訪河原村寄洲訴訟裁許絵図(元禄5年)を中心に、絵図に描かれた内容を読み解き、かつての多摩川流域村々の姿を探った。 | 角和裕子(当館学芸員) | 26人 |
| 美術史講座Ⅱ 「日本の仏画～見かた、楽しみかた」(全4回) 3年2月2日～3月2日の毎週水曜日 ※新型コロナウイルス対策のため中止。 | 鈴木泉(当館学芸研究員) | — |
| 歴史講座「近世文書解読入門」(全8回) 3年2月5日～3月26日の毎週土曜日 ※新型コロナウイルス対策のため中止。 | 角和裕子(当館学芸員) | — |

《新収集資料》

○寄贈資料

せたがやのおはなしほか 209点、陸軍軍曹任命書ほか 15点、陵墓要覧 1点、フセギ写真ほか 3件、弦巻耕地整理関係資料 2点、ボロ市記念乗車券ほか 5点、従軍証明書・軍服ほか 59点、大福帳・札額ほか 22点、筍掘りほか 12点

○寄託資料

丸山永畝筆「牡丹図」ほか 6件

○購入品

多摩川絵巻(昭和初期)、世田ヶ谷騎兵第一聯隊入営祝の幟(昭和初期)、玉川電車沿線案内(昭和初期)、ウーズレー乗合・貨物自動車パンフレット(大正末期)、三軒茶屋電気館プログラム(昭和9、10

年)、玉川名勝・梅林絵葉書(昭和初期)、赤鍾馗図(江戸時代後期)、白沢の図(江戸時代後期)、疱瘡絵の袋(近代)、松陰神社絵葉書(大正～昭和初期)、茄子図(昭和)、江戸惣鹿子名所大全三(元禄3年)、井伊家一条他(安政年間)、東京都区分図世田谷区詳細図(昭和31年)

資料館だより

No.75

発行年月日 令和4年3月25日

編集発行 世田谷区立郷土資料館

〒154-0017

世田谷区世田谷 1-29-18

☎ 03-3429-4237

FAX 03-3429-4925

広報印刷物登録番号 No. ■■